

論文の内容の要旨

氏名：北 澤 太 野

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

論文題名：体育授業研究のパラダイム転換をめぐる議論と展望

体育科教育学に関する研究は、体育授業実践の合理化と科学化に向けた知識の生産と集積をめざして出発した。その主軸を担ってきたのは体育授業研究である。体育授業研究は、我が国でも過去四半世紀にわたって精力的に取り組まれており、近年声高に叫ばれている教育のアカウンタビリティに応じるための努力が蓄積されてきた。

しかし、このような取り組みにも問題点がある。例えば「役に立たない体育科教育学」と揶揄されてきたことからわかるように、体育授業研究は、これまで教師の力量を高めるために多くの知見を生産してきたはずであるにもかかわらず、それらは必ずしも現場で授業を切り盛りする教師たちにとって、生きて働く有益な知恵にはなっていない。

こうした問題意識に端を発し、まず第 1 章では、我が国の体育科教育学を基礎付けてきた体育授業研究の論点の整理を試みた。体育授業の学習成果を規定する要因の一つとして、その授業を担う教師の存在があげられる。そこで本章では、特に体育授業に動員される教師の実践的力量について言及している先行研究を取り上げ、その成果を精査した。

その結果、我が国の体育授業研究の成果は概ね次の 3 つの段階を経て今日に至っていると考えられた。すなわち、①「カン」や「コツ」の世界に封印されていた教師の技量を客観的な指導法として同定することを志向する「教授技術の解明」の段階から出発し、②そうした教授技術を授業の文脈に即して適用することをめざす「教師の知識と意思決定の探究」の段階へと至り、そして今日、③教師の教授技術を担保している教師の思考過程を解明しようとする機運が高まりを見せている。

こうして築き上げてきた成果は、教師があらゆる授業に共通して要求される基底的な条件を整備したり、学習指導を淀みなく進行したりする際に求められる力量を形成し向上するために活かされることが期待されている。しかしその一方で、授業改善のための個別課題に貢献する知見やそうした授業の文脈に附随して問われる教師の力量については、十分な成果が蓄積されているとはいえない。

そこで第 2 章では、今後の体育授業改善に資する新たな観点を明確にするために、あるいはこれまで主張されてきた体育授業改善の観点を見直すために、従来の体育授業研究が依拠してきた理論的基盤に批判的・原理的な検討を加えた。

これまでの体育授業研究に残された課題は、研究成果として提出された知見に、実践現場の生々しい声が反映されておらず、体育授業のリアリティ（現実味）を十分には捉えきれないという点に集約される。授業中の教師の働きかけが、日常的にさまざまな環境条件を顧慮して行なわれていることを考えると、実験的な手続きで一部の現象だけを取り上げたり、環境条件を統制して理論化を試みたりすることよりも、これまで捨象してきた社会的な文脈を取り戻し、まずは、「ありのまま」を「まるごと」受け取ろうとする態度で体育授業研究に臨むことが必要である。

上記のような体育授業研究を推進するにあたっては、研究者が研究対象と親密な関係を築き、対象とする場にひたる（immersion in the setting）ことを通じて「内部者の視点」（emic perspective）を獲得することが重要な手続きとなる。なぜなら、その場で起こる物事、あるいは目の前に広がる経験の意味を理解しようとする場合、授業の外側に立ってしまったのでは、授業の内部に広がる世界にコミットメントできないからである。それは、調査者自身が現場に居合わせ、「同化」と「異化」の二重性を保有し、解釈の道具として機能するという、研究者の本質的な役割への問い直しである。こうして、調査者が自身の主観を携えて授業の構成者（教師・学習者）の主観とかかわり合い、自と他の、あるいは他と他の主観のズレの中で、授業の内部に広がる共同の主観性（間主観性）を発見し、理解し、洞察するに至ってはじめて、そこに構成される意味を、「いま・ここ」のリアリティとして掬い取ることができるのである。この場合、従来の体育授業研究の多くが、客観性・一般性を高める上でネガティブな視線を向けてきた「研究者自身の主観性」こそが、研究の推進力を生み出すという点に、方法論的な特徴があるといえよう。

以上のように、体育授業をその過程の事実に基づき説明しようとする実体的な見方から、授業の現実には「教授学的三角形」により絶えず構成されると捉える関係論的な見方へと、体育授業研究の立ち位置を

変更することの重要性が確認された。このような観点に立つ場合、体育授業研究の方法論的基盤は、「厳密な測定」よりむしろ「深い理解」へと傾斜していくことになる。

しかしながら、ここまでの体育授業研究に関する論考は、あくまでも理論的に検討されてきたにすぎない。そこで次章より、ここまでの議論を踏まえて、実際に学校現場でのフィールド調査を行い、実践的な検討を進めた。

第3章では、小学校の体育授業で調査を行った。そこでは、あるときには児童の反応に困惑したり、適用された教材の持つ価値がわからなくなったりと、苦闘しながらも授業に臨み、そして、児童との対話を通じて、授業中に生じた多くの気づきを掬い上げ、共有し、さらなる発展を促していく手がかりとして活用していくことに手応えを感じる教師の姿が浮かび上がってきた。このように個別で一回限りの事象から物事の本質に迫ろうとすることで、教師は常に正しい知識の保有者として授業に参加しているのではなく、学習者との対話を通じて教師自身も学び、暫定的に保有していた考えを変更していくことによって、積極的に授業に参加しようとする教師の姿が記述・解釈された。それは、体育授業実践に苦手意識や消極的なイメージを抱き、戸惑っている小学校教員に対して、体育授業が社会的に構成されていく過程を明示するものであり、積極的に児童に関わっていくための具体的なイメージを提供している。

続く第4章では、「授業の現実には絶えず構成される」という前提を踏まえた球技の授業を取り上げ、その授業の教授と学習の相互行為を通じて生成される意味について内在的視点から丹念に記述・解釈することを試みた。そこで露わになったのは、学習者の先入見に崩しをかけようとする教師の働きかけと、それを機に気づきを得た学習者の応答、そして、それを受けて柔軟に変化する教育的介入、等々、相互に影響を与え合いながら「いま・ここ」が形づくられるという、授業の「内側」の世界である。その作業を通じて、個別で個性的な授業において、「教えた内容」と「学習によって身に付いたこと」という顕在的な対応関係の他に、通常は可視化し難い、まさに「反省し、教育的対応を調節し続けるための教師の柔軟な認識」を捉えていくことの重要性が確認された。

以上のような観点から進められる体育授業研究では、「理想的な体育授業」の存在はいったん括弧に入れられ、まずは授業の「ありのまま」を「まるごと」捉えることから出発する。とはいっても、授業で観察される行為の「ありのまま」の状態がどうであるかが問題なのではない。ここで重要なのは、その授業で観察される行為を通じて立ち現れてくる意味である。だからこそ、教師や学習者に寄り添って授業中のさまざまな出来事に立ち会いながらデータを収集し、解釈する作業が不可欠となるのであり、「外側」からの観察に徹する行動科学的な研究とは趣を大きく異にするものである。

近年、広がりを見せる「反省的实践」という言説は、確かに授業における教授・学習を、個別で個性的な出来事、あるいは「生活世界において経験される日常」として、より実践的に理解し改善することを促してくる。しかし、たとえ日々の体育授業を「反省的实践」として捉えたとしても、そこから生み出された授業あるいは教授・学習に関する知識は、決して日々の授業実践の具体的な問題解決をただちに導くものではないため、必ずしも正当な価値を認められてきたわけではない。むしろ、事例を集積すればするほど、個々の特殊性ばかりが際立ち、授業改善につながる妙案を創出することは、いよいよ困難をきわめるようにも思われる。しかしながら、もとより、授業実践現場をあずかる教師にとっては、一般的・普遍的な「事実」を提示されることにもまして、「私」にも十分に起こり得ると思われる「現実」に触れることの方が、遥かに有益なのである。このことは、個別具体的な状況を入念に意味づけしていくことが、実践の改善には欠かせないということを端的に示している。こうして日常的経験をより「根源的な経験」へ、あるいは日々の授業実践において教師が無自覚的に用いる「ありふれた知識」を「洞察力に富んだ知識」へと深めていくことこそが、教師の専門性 (expertise) の向上のための重要な課題である。

以上のように、これまで本研究が具体的な授業から「意味」を汲み取り抽象的な論を展開することにこだわりの見せるのは、一つの授業の意味を紐解くことが、授業における実践行為、あるいは、「現実」を相対化する視点を用意することになり、多様な授業で立ち現れる意味の解釈に向けた架け橋となる可能性を秘めているからである。現場と研究のあいだには、現場を生きる中から問いを立ち上げてこそ研究が広がり、また深まるという方向と、研究知見の積み重ねから現場を見る視点が新たに拓かれるという方向が常にあり、この二方向が円環的に循環してこそ現場も研究も豊かになる。したがって、「ある特定の現象が置かれているところの『生』の現実を、その特性において解釈し、かくあって他とならなかった存在の根拠や意味を解き明かすこと」こそが、体育授業実践の改善を旨とする体育科教育学、あるいはそれを基礎付けてきた体育授業研究の存在根拠に他ならない。